

甲府盆地東部の戦後における果樹園地帯の変貌

山田邦彦

一、はじめに

甲府盆地は断層崖によつて囲まれ、山麓部には崖錐、扇状地があり、中央部には釜無、笛吹、その他の河川の沖積低地が発達している^①。気温は夏は特に暑く、夜間は冷え、温度較差は二一・一度C（全年で甲府観測）である。降水量は一二〇〇ミリメートル内外で典型的な内陸性気候を示している^②。

盆地農業が時代のうつりかわりによつて自給農業から商業農業へ変化した中で甲府盆地の戦後における果樹園地帯の土地利用の変化にはめざましいものがある。特に昭和三三年十二月の新笛子トンネル開通を契機として近郊農業地帯へと転換しつつあり、京浜地区と直結するようになつたのである^③。これは明治三六年中央線開通後、第一の山梨県における交通革命ともいふべきエポックである^④。

本論では戦後の甲府盆地東部における果樹園地帯の変貌は交通の発達によつてどのように展開されたのか、以上の点を中心に述べてみたい。

二、概説—戦前のブドウ栽培地帯の形成過程—

第1表 明治時代における勝沼から東京までの
ブドウ輸送費用

ブドウ輸送年代	明治維新当時	明治10年～中央線開通	中央線開通後
一駄の代金	約50銭	約4円	16～17円
一駄の運賃	75銭	約3円50銭	約50銭
東京着値段	約25円	12～13円	30円
輸送日時	6日	3日	5時間50分

資料…東山梨郡誌

甲府盆地のブドウ栽培の始まりは一一八六年（文治二年）、日川扇状地の八代郡上岩崎村の入会山中「城の平」で里人、雨宮勘解由によつて普通の野生種とは違つたものが発見された^⑥。その後、元和年間（一六一五～二三）に医師、甲斐徳本が上岩崎で棚作り法を考案した。ブドウが商品生産として発展したのは江戸時代で甲州街道を馬の背で江戸の問屋へ出荷されていた^⑥。また当時の栽培面積、生産量は非常に少なく産地も甲州と大阪に限定されていた。明治時代になると政府が殖産興業にのりだし、果樹栽培を奨励したので各地に新興産地ができた。山梨県では米国種のブドウが明治八年、甲府城内に栽培された^⑦。こうして明治初期には多くの外国品種が導入され、ブドウ酒醸造もフランスへ留学させて研究した。また從来の竹棚から雪害対策として鉄線棚が考案された。中央線が明治三六年六月甲府まで開通した。これを一転期として勝沼町ではブドウ生産一本にしぼり組合制度によつて新しい農業へ転換した^⑧。開通当初、勝沼駅がなかつたため（大正二年勝沼駅開設）、塩山、初鹿野駅から出荷され不便であった^⑨。開通前は東京まで三日を要したが、開通後は約六時間に短縮され、京浜市場と直結されるようになつてきた^⑩。また大正年間は第一次世界大戦後の好景気とマユ価の下落に対しブドウの栽培反別、収益も増大してきた^⑪。昭和初期の経済恐慌によつて農家は大打撃をうけ、ブドウ出荷の場合、無条件委託販売と無秩序の自

第2表 山梨県経営耕地利用形態の推移

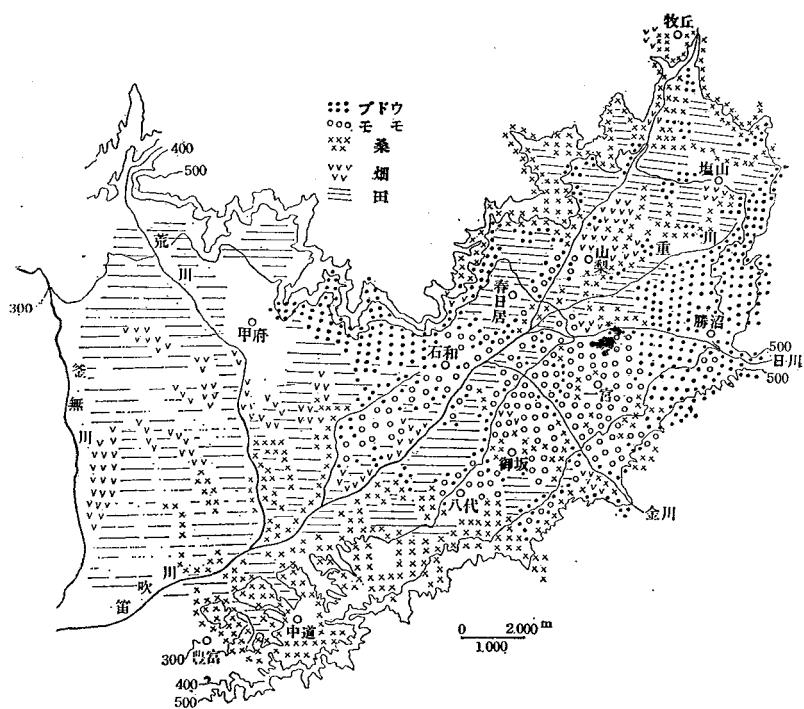
年 次	総面積 (ha)	田 (%)	桑園 (%)	畠 (%)	果樹園 (%)
昭和4年	52,581	34.6	47.2	15.1	1.7
20	52,073	34.4	32.3	29.4	3.0
25	44,718	37.4	16.1	43.9	2.4
33	45,766	35.8	21.2	31.9	6.9
35	46,251	37.6	22.4	30.6	9.2
38	44,152	37.0	23.3	26.9	12.4

果樹振興基本計画

由出荷の欠陥がこの不況にいつそう輪をかけたのである^⑨。また昭和九～十一年にかけて大暴風、冷雨、冷凍害などが発生して大打撃を受けたが、県の指導と助成金の交付によって農家も自力で回復した。その後、勝沼ブドウ研究会を作つて試験圃を設置して研究し、各農家への普及にも努めたのである^⑩。その結果、昭和十六年には戦前の最高を示すようになつた。戦時中は電波兵器に酒石酸の必要からブドウ果実の大部分を強制的に酒にしたために他の果樹のように転換するものが少くなかつた。

三、東部果樹園地帯戦後の形成過程

戦後の食糧不足などによつて米麦が中心であつた。果樹はあまり統制がきびしくなかつたために、収穫期には買出入人が各農家へ殺到した^⑪。そして昭和二四年の統制撤廃と共に果樹ブームは一段とたかまり、しかも農地改革によつて自作農が増大したために果樹栽培が急増した。上層農家を中心として戦後のヤミ景気によつて得た資金でブドウ園を復旧させ、やがて全農家へ拡大していく。戦時中、畠に転換した農家もブドウ棚を残しておいたので再園化が容易に行われた。甲府盆地東部の樹園化は拡大してゆき、昭和三〇年頃までは戦前をうわまわるくらいのブドウの導入が行われた。特に昭和二八年以降、養蚕が不振になり、急増した。この場合、戦時中、普通畠へ転換していたところからはじめ、しだいに桑園、水田に及んでいった^⑫。この傾向の強かつたのは東八代郡を中心とした養蚕地帯である^⑬。これら



第1図 甲府盆地東部の土地利用

の地区では勝沼、祝地区との競合をさけるため、デラウエアを中心にベリー、A、ネオマスカットなどを栽培した。果樹園が増大するにつれて消毒液のために養蚕のできない農家が出現したり、中、下層農家では比較的の資本がかからず、また収穫の早い桃を導入した。

以上の過程をたどりながら戦後の甲府盆地東部の果樹栽培は発展してきた。現在、勝沼、祝を中心とした東部扇状地ではブドウ、京戸、大石、金川の複合扇状地を中心とした一宮、御坂では桃が栽培されている。

戦後の果樹栽培の特色として果樹が多角化の一環として取入れられていること、きわめて零細な栽培面積であることがあげられる。この結果、特に家族労働

第3表 果樹栽培面積広狭別農家数

項目	全 国		山 梨	
	実数(戸)	比率(%)	実数(戸)	比率(%)
0.5反未満	130746	20	2455	13
0.5~1反	118199	17	3162	18
1~3反	263692	39	7324	41
3~5反	88479	13	2812	16
5~1町	60046	9	1980	11
1~1.5町	11085	2	240	1
1.5~2町	2479	0	32	0
2町以上	1082	0	10	0
合 計	675808	100	18015	100

農林省 1960年世界農林業センサス 果樹編
(1961)

力を中心に多量の労働力と多額の肥料購入に投資し、経営を集約化して反当の高い収入をあげようとしている^⑩。

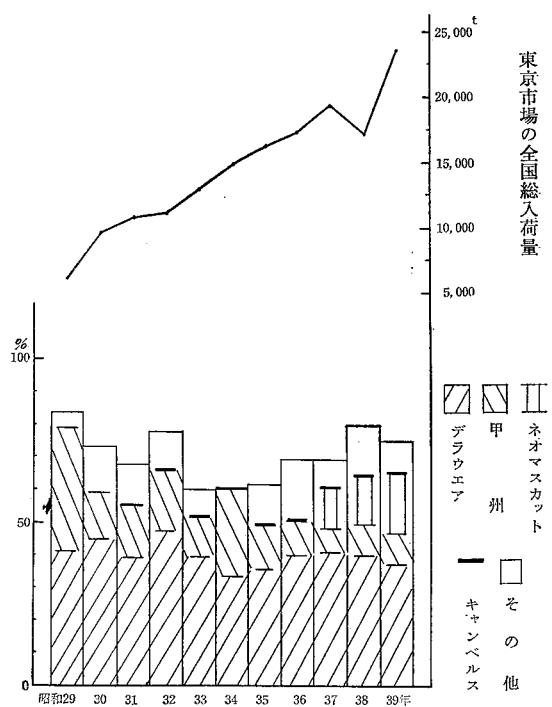
四、新笛子トンネルと果樹農業

山梨県は東京都の隣接県にかかわらず産業の発展は非常に遅れていた。その原因としてまわりがけわしい山で囲まれており、大消費地を近くにひかえていながら中央線の輸送力、道路の整備などが遅れていたためである。そのために一時は増殖も停滞した。

こうした中で山梨県は昭和二八年産業振興総合計画をうつたて、京浜地区への最短路線である笛子峠の改善を計画した^⑪。そして

県は農業の開発を重点目標としたことが注目される。甲府盆地は果実、蔬菜などの商品作物の育成には適していた。しかし、鉄道、道路の整備の遅れから市場への輸送を困難にしていた。山梨県では新笛子トンネルの基礎調査を昭和二八年よりはじめ、日本道路公団によって昭和三三年十二月七日、道路トンネル（三〇〇三メートル）が開通した。その結果、従来甲府から御坂峠越え、富士吉田経由で約七時間かかり、旧笛子峠越えで約四時間半かかっていたのが約三時間半に短縮された。そして桃の出荷は全部自動車便へ移り、昭和三五年六月、勝沼駅の貨物取扱中止となつたためにブドウも遠距離を除いてすべて自動車便へ移行し、甲府盆地の農業は京浜市場と直結されたのである^⑫。

新篠子トンネルの開通によつて県の自動車輸送が発展した。自動車輸送は昭和三〇年以降、全国的に急増している。中央線の貨物輸送量の増加は少なく、しかも単線であるため限界に達している。そのために山梨県でも道路開発によつて自動車輸送は蔬菜などの出荷に機動性と機敏性をより發揮できるようになつたのである。トンネル開通後の甲府盆地における果樹栽培の生産地形成が強力に行われるようになつたのである。そして個々の自由出荷にかわつて大量取引の有利性をうみだし、共販体制の確立の必要性を農民達は痛感した。



第2図

東京市場における山梨県産ブドウの入荷状況の割合

蔬菜もトンネル開道後は県下各地に近郊園芸栽培地帯が増え、ビニールハウスによる促成果菜、山間地の抑制果菜が栽培されるようになつてきた。花奔も甲府盆地では古くから栽培されてきたが輸送の点で県内消費に限定されていいた。しかし、新篠子トンネルの開通及び国道二〇号の整備によつて昭和三三年以降は貯蔵性や長距離輸送に耐える力が弱いため果実以上に増加したのである。

山梨県産の果実、蔬菜などの生産販売数量が新篠子トンネル開通後は流通関係

175 甲府盆地東部の戦後における果樹園地帯の変貌

第4表 東京市場におけるモモの产地別・年次別入荷状況（単位 t）

年度 県別	昭和30年	昭和32年	昭和34年	昭和36年	昭和38年	昭和39年
山 梨	5,366	9,015	10,271	13,550	14,344	19,170
岡 山	623	356	271	6	—	—
福 島	968	1,583	1,818	2,337	1,915	2,759
総入荷量	9,305	13,582	15,895	18,459	18,675	25,611
山梨産の 占める割 合 (%)	58	66	65	73	77	75

山梨の青果物販売概要（1965）

第5表 増加した果樹園の転換前の地目 過去1年間 (%)

地 域 名	田	畠	桑 園	そ の 他
県 計	46.9	27.6	24.0	1.5
甲 府 市	66.5	16.9	10.8	5.8
塩 山 市	49.9	23.3	24.3	2.5
山 梨 市	52.6	18.7	27.8	0.9
東 山 梨 郡	63.9	20.8	15.0	0.3
東 八 代 郡	52.4	24.5	22.4	0.7

山梨県：山梨県の農業（1964）

の変化などによつて京浜地区へは昭和三四年以降急増している。また山梨県産のブドウの六五%は青果市場へ出荷され、さらにそのうちの七六%が京浜市場へむけられているが、ほとんど新筐子トンネルを経由している、昭和三五年に初出荷したジベレリン処理の種なしブドウの東京市場総入荷量の九〇%は山梨産で大部分は共撰によるものである⁽²⁾。

桃の場合には山形、福島では生産量の六〇%が加工用になつていてのに対し⁽³⁾⁽⁴⁾、山梨県産では八〇%も市場出荷となつていて、桃はブドウよりも貯蔵性に乏しいために距離が近く、交通の発達している京浜地区への依存度がブドウ以上に高い割合を示している。東京市場では岡山産の桃は昭和三七年以降、入荷量がなくなり、現在では東京近郊の主産地としての地位を築いたのである⁽⁵⁾。



写真1 日川河原のブドウ畠

白く見えるのがビニールハウスでジベ処理をした種なしブドウ栽培である。この河原を吹く風が甲州ブドウの着色と味をよくしている。(1962撮)

交通条件の改善は果実の生産地と市場の距離を短縮し、生産地の市場条件を決定的に有利にするものであるが、一方においては生産者たちの非計画出荷を也可能にして長期的にみた場合、市場条件がかえつて悪くなる可能性がある。これを防止するためには生産地における果実共同販売組織の整備が必要である。山梨県では昭和三五年、主産地府県の激しい販売競争に対処するために山梨県果実販売農業協同組合が誕生した。これによつて販売、宣伝、生産指導事業は一元化されたのである²²⁾。

五、東部果樹園地帯の現況

(一) 勝沼

東部果樹園地帯の勝沼ではブドウ、一宮、御坂では桃、ブドウ、石和では温泉開発とブドウ、リンゴが中心に栽培されている。新笛子トンネル開通と国道二〇号の改良後の各地域の農業經營の状態をながめてみた。

勝沼町の全耕地面積一〇〇八ヘクタールのうち八一三ヘクタールが果樹園、そのうちの七一%がブドウで残りは桃である。土質は埴土が大部分である²³⁾。年平均気温は一三・六度、年間平均降水量は二二三二〇ミリメートルで少なく、特に日較差が大きく、「笛子おろし」は日川沿いに夜、山地から

盆地に向って吹く風によつて甲州ブドウの着色と甘味が増すのである⁽⁶⁴⁾。

勝沼駅と町が二キロメートルも離れており、昭和三五年の貨物取扱中止以後は不便になつた⁽⁶⁵⁾。現在は町の中央を通る国道二〇号を利用して自動車輸送が行われている。最近では通行量の増加にともない国道の狭隘を感じ今後とも交通上の大大きな問題となろう。

ブドウは全町に作られており、昭和三九年の調査によると品種別ではデラウエア三九一ヘクタール、甲州二六五ヘクタール、ネオマスカット四〇ヘクタールとなつてゐる⁽⁶⁶⁾。地域別にみると、先進地帯の勝沼、祝では甲州、デラが多く、新興地帯の東雲、菱山ではデラが中心で、他にネオマス、ベリーA、巨峰などの比較的新しい品種は町全域にわかつてゐるが、醸造品種は少ない⁽⁶⁷⁾。デラにジベレリン処理⁽⁶⁸⁾をした種なしブドウが多く、昭和三九年には五五%が処理され、町、農協、農家が一体となつて栽培技術及び品質向上をはかつてゐる。また昭和三四年より祝地区を中心が始まつたデラのビニールハウス栽培による早期出荷も年々増加しており、昭和三九年には約三ヘクタールになつた。ビニールハウス内でジベ処理するため収穫時期も露地より一ヶ月くらい早く六月下旬～七月下旬に東京市場へ出荷され好評である⁽⁶⁹⁾。最初にデラ、ネオマスなどの品種が出まわつており、消費者があきたころ甲州種が出荷され、リンド、カキ、ミカンなどと競合し、年々販売が不利になつてきてゐる。そのため、甲州種からデラ、ネオマスなどに転換してゆくものが多い。また貿易の自由化によつて輸入乾ブドウから簡単にポートワインができるので甲州種のブドウ酒原料への供給も少なくなり対策に頭を痛めている⁽⁷⁰⁾。

勝沼、祝地区の各農家では昔から京浜各市場と取引関係にあるので共撰しない。それは各農家が名のとおつた商品として共撰ブドウより有利に取引できるためである⁽⁷¹⁾。勝沼の場合でも農協では主に京浜市場を指定しているが各出

荷組合毎に各全国各地へ出荷している。甲州ブドウの出荷方法は各自が指定の枠内における判断で自由出荷八〇%、各出荷組合で指定された中で共撰が二〇%である。農協でも共撰の方向へ指導しているが、各農家の品質の特色、伝統、生産者相互の対人関係が複雑のために現状では簡単にふみきれないものである。しかし、デラは大部分が共撰による出荷である。他の新興地帯に比べると出荷体制の足なみがそろわざ遅れている。このように共同化の遅れている勝沼でも共同防除が実施されている。現在では勝沼町東部の二〇〇ヘクタールで全町の三分の一にあたる。その結果、人件費、薬剤の節約、手間がかからず消毒回数も増加して完全になり、現在では個人の噴霧器購入が減少し、個人色の強かつた作業が共同化へと変化してきた。従来は勝沼、祝地区では一〇・三〇アールで専業が現在は五〇アールでも兼業化へ進むものが多い⁽⁵⁾。

勝沼の観光ブドウは觀賞用としては明治二七年宮光園が開設されたが、当時は近在からの客はなく、大部分が東京、近県からの有名人などであった。これに引続いて二、三の觀光園が開園した⁽⁶⁾。戦後、觀光客の誘致に力を入れ、大消費地京浜地区が近いので觀光と生産物の販売拡張に成果をおさめてきた。昭和二九年頃から觀光ブドウ園が増加した。都内へ大規模の宣伝にのりだし、活況を呈してきた。農家の庭先經營を主体とした方法はすたれていった。その後、昭和三三年十二月、新築子トンネル開通を契機に快適なドライブができるようになり、觀光客は増加の一歩をたどった。觀光客の足をとめさせるために従来から実施されていた觀賞用ブドウ園の中で自由に取らせて販売する「露地ブドウ狩」を町が中心になつて一部の農家で昭和三六年から開園した結果、これが大成功し、昭和三九年には一六〇園になつた⁽⁷⁾。最近では觀光協会で小売協定を決めているが、平日と休日では値段が多少違つていて。またシーズン中のブドウ販売数量は一軒で最低二トンから最高二四トンまで大きな開きがある。觀光客に対する接待の労力は自家

第6表 昭和30年と昭和39年の観光ブドウ園数

年度 市町 項目	昭和30年					昭和39年					小計	
	勝沼町	山梨市	御坂町	石和町	甲府市	小計	勝沼町	山梨市	御坂町	石和町	甲府市	
観光遊園	20a以上	11	2	1	5	19	11	9	2	1	6	29
	20a以下		7	1		8		39	2		1	42
ぶどう狩園				1	6	7	106		14	35	7	162
直売所				3		7	43	14	5	35	15	112
計		11	12	3	18	44	160	62	23	71	29	345

山梨県特産課調査資料

労力の他に二〇アール以上の所で平均八・六人（平日）、二十三・六人（休日）に及んでいる。各ブドウ園の設備投資は莫大なもので国道沿道にあるブドウ園は競ってデラックス化している。そして、各園の観光客誘致合戦が派手に展開されており、弊害も生じてきている。新傾向として五・六戸のブドウ栽培農家が共同で一ヶ所の遊覧園を中心に観光客を誘致し成功している。勝沼を中心とした国道沿道では駐車場がなかつたが、最近はブドウ棚を高くして観光バスが入れるように改善され、六五%は収容可能になった。またブドウ出荷の際の荷いたみを防止する意味から昭和三八年より農道の鋪装が実施されている。

勝沼町企画観光課の調査によると、

- ① 昭和四〇年は昨年より観光客は増加しているが、不況のため消費額の伸びは少ない。
- ② 八一九月は自家用車が多いが、十月には富士五湖、昇仙峡をコースに組んだ観光バスが多い。
- ③ 共同経営によるブドウ園ができ、バス会社や出版社とタイアップしているものが多い。
- ④ 観光客は毎年早く来るようになり、七月にはジベ処理の種なしブド

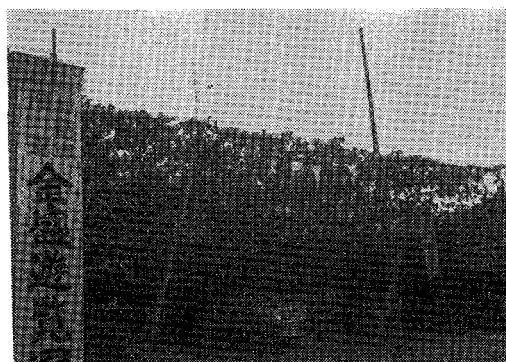


写真2 上岩崎の観光ブドウ園

道路に面したブドウ棚を高くして駐車できるようにしている。奥のブドウ畠で自由にブドウ狩りができる。(1962撮)



写真3 勝沼の観光ブドウ園でのおみやげ用ブドウの出荷風景 (1962撮)

ウに人気があつまつた。

⑤ 勝沼駅が町から離れており、しかも急行が通過するために鉄道利用者は減少している⁽⁴⁾。

以上、勝沼は新篠子トンネル開通後、甲府盆地東部では市場出荷、観光ブドウ園など国道沿道の立地条件をいかして順調に発展した地域の一つである。

(二) 一宮

一宮町の相興地区は勝沼町と隣接しているためにブドウ栽培が多い。一宮地区では昭和五年、末木の加藤氏がサ

グランボの栽培をしていたことから、東京市場をみて岡山、静岡、神奈川から出荷される桃に注目し、静岡県興津の園芸試験場で桃の栽培知識を得て岡山白桃などを導入し、栽培したのが始まりである⁽⁴⁾。現在の經營状態をみると果樹園八六五ヘクタール（桃四六〇ヘクタール、ブドウ三八〇ヘクタール）、水田九〇ヘクタール、普通畑三五ヘクタール、桑園二六ヘクタールとなつており、従来は東郡の養蚕地帯の一つであったが、ほとんど果樹に転換している。最近は桃の忌地現象などのためブドウへ転換する傾向がある。品種別にみると桃は早生種のものが多い。ブドウはネオマスが一番多く、ついで甲州、デラの順になつている⁽⁵⁾。出荷状況をみると新篠子トンネルの開通と国道二〇号の整備によつて約三時間で京浜市場へ直結し、御坂越えで静岡、中京、関西、九州市場へ自動車輸送が行われ、北海道へは貨車輸送が主体となつてゐる。出荷体制も町内三農協に各部落の三四単位組合があり、共撰体制も一部では小規模の組合がまとまつて大型化している。そして作業、費用がかからず品質を統一するためにサンプル販売が可能である⁽⁶⁾。

（三）御坂

御坂町は金川扇状地上にあり、戦前は養蚕が主体となつてゐた。最近は桑園から果樹への転換がさかんに行われてゐる⁽⁷⁾。昭和三八年に錦生農協では當農改善計画を各農家に提出させた結果、昭和三八年現在、四二五ヘクタールの果樹を昭和四一年には七〇〇ヘクタールにすることを希望している。最近は一日四万貫を目指に共撰場が設置され、組合員一〇〇〇人で共撰機三セット一二台を導入し、桃の共撰施設では県下でも大きい方である。桃は貯蔵がきかないので品種の植付指導を行い、労力配分及び市場との関係、他産地とのかちあいをさけるようにしてゐる。こうして桑園中心から經營層の変化、国道の整備及び御坂トンネル起工によつて今後とも果樹の増加がみこまれてゐる⁽⁸⁾⁽⁹⁾。また

下野原地区ではビニールハウスによる菊栽培を行つてゐる。出荷先は農協を通して京浜地区へ自動車で輸送している。

(四) 石和

石和の果樹栽培は明治四〇年笛吹川大水害によつて砂礫化した笛吹川廢河川を小松氏が開墾し、肥沃の土地にしようと一二〇ヘクタール買収して笛吹川耕地整理組合を設置し、八〇万円の工費で昭和四年まで耕地を整理した。

農作物の変遷をみると、明治末期より大正初期にかけて桑園が多かつたが、昭和初期にはブドウ栽培も盛んになつてきた。現在はブドウ、リンゴ、桃、柿が多い^⑭。温泉熱利用によるジベ処理のブドウのビニールハウス栽培がさかんである。温泉熱を利用した熱帶植物園もあり、旅館が農園を經營しているのも一〇〇軒くらいある。ブドウ酒工業もさかんでマルス、モロゾフなどの他県からの企業も入つてきているが、地元は組合組織のものが多い。果樹の出荷時期は東部扇状地帯の産地より七~一〇日早く、リンゴも信州産より一五日くらい早いので有利に販売できる。

昭和三〇年一二月、三一度Cの温泉が一日に三六〇〇石、小松農園でわき、昭和三六年に地元バス会社が保養所設置のためボーリングした結果、温泉採掘に成功し、青空温泉として全国的に有名になつた^⑮。昭和三八年に六〇度Cの湯がわき、温泉旅館も増加した。県では泉源を保護するため県営の湧出口を掘り、各旅館、家庭に分湯した。石和温泉の湧出量は毎分一リットルである。国道二〇号線をはさんで北側に五〇くらいのホテルがあり、桑園、果樹園から転換している。

石和は東八代郡の中心地であり、しかも甲府市の近郊都市的性格をも備えている^⑯。また国道二〇号、一三七号の接点であるため新笛子トンネル開通後は温泉の開発と共に観光農業が発達してきたのである。現在工事中の中央道、

御坂トンネルの完成後は甲府盆地の中で大きく変貌することであろう。

以上、甲府盆地東部の四つの果樹園地帯の現状をみてきたが、新海子トンネル開通と国道二〇号線の改良を契機として京浜地区との時間の短縮によつて果樹の出荷方法も農協を中心とする共撲、共販体制が確立され、大部分は自動車輸送に転向した⁽⁵⁾。また勝沼町には遊覧ブドウ園があり、国道沿道では農家が副業的に庭先でおみやげ用のブドウを販売していたが、トンネル開通後、自由にブドウ狩りのできる観光ブドウ園ができ、勝沼、山梨、石和、御坂の国道沿道では直売所も多くなり、観光客を多く集めている。

六、むすび

甲府盆地東部は戦後の果樹ブームのため桑園、普通畑から果樹園へ転換された。また戦後実施された農地改革によつて小作農は主体性のない經營から積極的に經營するようになり、商業農業の発展をうながした⁽⁶⁾。

昭和三三年末の新海子トンネル開通、国道二〇号線の整備などの交通条件の発達によつて輸送上、問題のあつたブドウ、桃や貯蔵の困難な蔬菜、花卉も大消費地と直結するようになり⁽⁷⁾、京浜を中心とする近郊農業地帯の一部になり、京浜市場の需要や市況の変化の他にまゆ価の不安定、經營層の若返りも影響している。また經營耕地が平均五〇アールと小規模であるので、小面積で多くの収益をあげるために果樹の導入が活発になり、農業經營も改善されてきている⁽⁸⁾。道路の発達が大消費地と結合されることによつて果樹の出荷は大部分が自動車輸送されるようになつた⁽⁹⁾。観光ブドウ園が出現したのは大きな特色となつてゐる。これは県内の資本と労働力によつて經營されている点

は他とは違った点である。以上のようにトンネル開通と道路整備によつて京浜市場との時間が短縮され、国道二〇号、一三七号沿道は果樹栽培が増加している。それに対し国道より離れた地域では道路が整備されず、輸送面から考えて桑園が多くなつてゐることが甲府盆地東部の戰後ににおける土地利用を変貌させた原因と考えられる。

本研究の調査にあたつては終始御指導していただいた籠瀬良明先生、斎藤光格先生、現地で御協力いただいた山梨県農政課 石田真氏、特産課 有馬俊彦氏、山梨園芸高校 広瀬公識先生、関係市町村役場、農協の方々、論文構成について御協力いただいた日本大学桜丘高校 真田道彦氏に深く感謝の意を表する。

参考文献

- ① 田中啓爾 甲府盆地(+) 地評一卷二〇号 (一九二六) 九二五~九四五頁
- ② 山梨県 山梨県の園芸 二~三頁
- ③ 来米速水・小林忠夫 日本の農業 一九 道路と農業 四~五〇頁 一九六三
- ④ 拙稿 甲府盆地東部の戰後における果樹園地帯の変貌 日本大学文学専攻科研究論文 一一~四〇頁 一九六四
- ⑤ 勝沼町 勝沼町史 一九六二
- ⑥ 飯田文弥 近世甲州ブドウの生産構造と流通 甲斐史学 上 一~二〇頁、下 二〇~三〇頁
- ⑦ 村上節太郎 日本の葡萄栽培地域の地理学的研究(+) 愛媛大学紀要 一三~一四頁 一九六四
- ⑧ 江波戸昭・小林孝一 甲府盆地のブドウ(+) 地理六卷一号 一五一~一五四頁
- ⑨ 拙稿 甲府盆地東部におけるブドウ栽培地帯の形成 日本大学卒業論文 三五~四三頁 一九六三
- ⑩ 東山梨郡 東山梨郡誌 一九二六
- ⑪ 地理調査所地図部 日本の土地利用 二〇一~二三三頁 一九五五
- ⑫ 四四~五六頁
- ⑬ 前掲(⑨) 四四~五六頁
- ⑭ 江波戸昭・小林孝一 甲府盆地のブドウ(+) 地理六卷二号 二六二~二六四頁 一九六一
- ⑮ 斎藤叶吉 甲府盆地における桑園と果樹園の立地関係 一〇七~一九頁 人文地理十卷二号 一九五八

185 甲府盆地東部の戦後における果樹園地帯の変貌

- (16) 横田忠夫 甲府盆地における果樹栽培の現況 一一八~一二二八頁 地評三〇卷一二号 一九五七
(17) 安藤万寿男 日本の果樹 七四~一〇五頁 一九六三
(18) 山梨県 産業振興総合計画 一九五三~一九六一
(19) 前掲(17) 一〇九~一一三頁
(20) 山梨県果樹園芸会 山梨の園芸 八~一五頁 一〇卷一二号 一九六二
(21) 長谷川典夫 東北の果樹地帯 一〇六四~一〇七九頁 地理四卷八号 一九五九
(22) 桜井秀三 福島盆地における果樹栽培の展開過程 人文地理一七卷二号 三八~五五頁
(23) 山梨県 山梨の青果物販売概要 一九六五
(24) 前掲④ 四九~六〇頁
(25) 夜久孝 農業生産の立場からみた山梨県の立地及び土壤条件の地域性に関する調査研究 後三一~七三頁 一九六二
(26) 前掲(25) 前一二~三五頁
(27) 佐々木博 甲府盆地東部と南西ドイツ Kaiserstuhl におけるブドウ栽培景観の比較 一二九~一三二頁 地評三九卷二号
(28) 一九六六
(29) 前掲④ 六三~六六頁
(30) 勝沼町 町政要覽 一九六五
(31) 山梨県果樹園芸会 山梨の園芸 二五~二九頁 一二卷一〇号 一九六四
(32) 前掲② 一一~一二頁
(33) 内藤今朝行 デラウェアのビニールハウス栽培(体験記) 二四~二六頁 山梨の園芸九卷一〇号 一九六一
(34) 山梨県果樹園芸会 山梨の園芸 一二卷四号、五号では貿易の自由化によるバナナの輸入問題にふれていく。
(35) 小林孝一 ブドウ主産地の展開 一二〇四~一二〇九頁 地理七卷一号
(36) 岩崎農協 葡萄と岩崎農協(小冊子) 一九六三
(37) 勝沼町 勝沼葡萄郷の動態(小冊子) 一九六四
(38) 山梨県経済部果樹振興基本計画一果実山梨の現況と展望 七四~八一頁 一九六五
(39) 勝沼町企画観光課の観光客動向調査及び聞き取りによるもの。 一九六五

- ④① 一宮町 果樹の栄 七〇八頁 一九六一
 ④② 一宮町 一宮町の農業概況 一九六五
 ④③ 山梨県 農協組織整備調査結果書
 ④④ 金子晶子 金川扇状地の果樹園化に対する一考察 一九六一年日本地理学会発表要旨
 ④⑤ 前掲④ 七四、八九頁 一九六三
 ④⑥ 山梨県農業会議 御坂町農業振興事業概要 一九六三
 ④⑦ 石和町 農業振興基本計画書 一九五九
 ④⑧ 石和町 県営石和温泉の実態と都市計画の概要
 ④⑨ 山梨県 山梨県の農業 一九六三
 ④⑩ 山梨県 山梨県の青果物規格条例 一九六三
 ④⑪ 横田忠夫 変貌しつつある農村 一二六～一三六頁 現代の地理 一九六〇
 ④⑫ 山梨県特産課 果樹農業の趨勢 一九六三
 ④⑬ 浮田典良 都市化の農業への影響 八六～一四頁 経済地理 一九五七
 ④⑭ 前掲② 三五～五〇頁
 以上その他 P.C. Morrison (1962) : Viticulture in the Kofu Basin, Japan. North Western Univ. Studies in Geogr. 6
 岡本兼佳 農業構造の地域的研究